

平成 26 年度 海外臨床薬学研修報告書

「何を見学し、何を学び、何を得たか」

平成 27 年 2 月 21 日～平成 27 年 3 月 8 日

100973351 野村優美子

「アメリカの進んだ薬学教育を体感したい」

実務実習を通じて抱いた強い思いを胸に、私はアリゾナ大学への海外研修を志望しました。

実習を通して日本のチーム医療の現場に積極的に関与する薬剤師の姿を見て憧れを抱きました。そんな理想の薬剤師から、「海外は薬剤師の職域が広く、日本と違う薬学教育が行われているんだよ」と言われ、自分自身でそれを確かめてみたいと思いました。

海外研修は2週間という短い期間でしたが、短い期間で沢山のことを吸収しようと私は2つの目標を立てました。

第一に、アメリカと日本の薬学部の違いについて学ぶこと

第二に、疑問に思ったことは積極的に質問し、友人・後輩へアウトプットすることです。

実際に研修に参加して、見るものすべてに圧倒されました。中でも「ディスカッションの熱さ」には心打たれました。ここでは全ての学生が積極的に議論に参加し、議論の中で疑問に思ったことはすぐ教授に質問していました。日本では、授業で多くの質問が飛び交うような場面はではなかなか見られません。

さらに議論には、薬学生、レジデント、教授など様々な世代でメンバーが構成されており、メンバーが構成されていました。名城大学においても4年次に行われる薬物治療学では、治療方針を話し合うディスカッションが行われますが、メンバーの構成は4年生のみです。

私はディスカッションを見て、なぜ忙しいはずの教授が週1回の頻度で学生たちのディスカッションに参加できるのか疑問に思い、質問しました。すると、教授は言いました。

「ディスカッションに参加して、学生が間違った方向に参加しないよう導くことが私の仕事なんだ。だからディスカッションに参加するのは当たり前だよ」

この言葉を聞いて、私は心打たれました。エイジミキシングの教育が低学年のころから週1回の頻度で行われており、教授と生徒が互いに熱い思いをもってディスカッションに参加している。そんな環境があるからこそアメリカの学生は高い意識と誇りをもって行動していて、それが熱いディスカッションに結びついているのだと感じました。

また、実際にアメリカの医療現場を見る機会もありました。アリゾナ大学内の病院をレジデントについて回り、レジデントの1日を体感することができました。参加したカンファレンスの中で、レジデントが当たり前のように医者に質問する様子、回診の中で薬剤師としての意見を求められている様子、さらにその意見が治療に反映されている様子を目にして、「アメリカの中で薬剤師の地位が高い」ということを実感しました。

今回の研修を通じて感じたことは、「アメリカの薬学教育の質が高い」ということ、「学生のうちから多くの時間を実習やディスカッションに割いており、それが現場ですぐ役立っている」ということです。日本の大学でもこのような教育を行えば、現場ですぐ役立つ薬剤師が増え、薬剤師の地位向上につながるのではないかと感じました。

私はこれから、この研修を通じて学んだ経験や感じた思いを友人、後輩に広めていくことで、周りの仲間のモチベーションをあげられる存在になりたいです。

そして同じ志を持つ仲間とともに、薬剤師の明るい未来を作り上げていきたいと思えます。